



Title	新漢語「発展」の基本語化と類義語「開発」との比較：「太陽コーパス」を中心に
Author(s)	畢, 亜莉; Bi, Yali
Citation	研究論集, 21, 55 (左) -72 (左)
Issue Date	2022-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.21.l55
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84009
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_rjgshhs_21_p055-072_l.pdf



新漢語「発展」の基本語化と類義語「開発」との比較

—「太陽コーパス」を中心に—

畢 亜 莉

要 旨

日本の近代化は、言語にも反映している。近代新漢語「発展」と「開発」はその一例である。

「発展」と「開発」は現代日本語の中で、一般的に使用されている。しかし、近代初期に「発展」と「開発」はどのように使用されていたのか。「発展」はどのように基本語化したのか。「発展」と「開発」の使用初期にどのように使い分けられたのか。

本稿は明治期の雑誌コーパスを通して、「発展」と「開発」の共起語句の調査により、以下の結果を得た。

- (1) 「発展」は近代新造語である。使用された初期には、他動詞用法であり、ほとんど自由民権運動に関わる文章に使われていた。1909年と1917年には、自動詞用法が増加し、主体となる語句はほとんど「公私」「事業」の分野に集中する。それは日本の殖産興業政策と関わっていると考えられる。
- (2) 「開発」は、明治初期に、自由民権運動に関わる文章に使われ、その後、自然資源の開発としてよく使われていた。「開発」は明治初期に、「発展」と区別せずに使用されていた。
- (3) 日本近代化とともに、「発展」は類義語「発生」「生長」「開発」「開展」「舒展」「進め(る)」「発顕」「顕露」「顕す」と競合い、「基本語」となった。「発展」と「開発」の比較により、「開発」は自然資源と共起であるのに対し、「発展」は各産業に関する言葉と共起する。

1 はじめに

田中牧郎(2012b)では、樺島忠夫(1981)が語彙を星雲に喩えたことに基づき、語彙の中心にあって、安定してよく使われる語彙を「基本語」とし、周辺にあって不安定であり使われない語彙を「周辺語」だとしている。田中牧郎(2014a)では、近代語の雑誌コーパスを利用し、

年次別の語彙頻度を指標に、語彙レベルを分けて、年次による語彙の移行を観察することで、明治後期に基本語化した語彙（固有名詞を除く）81語を抽出している。これらの基本語化した語彙には、和語28語（明るい、偉いなど）、漢語50語（援助、拡大、発展など）、混種語3語（かなり、大したなど）が含まれる。基本語化した語彙の中においては、漢語の占める割合が一番多い。田中牧郎は雑誌コーパスを利用し、明治・大正期の語種の調査を行い、明治期に漢語の占める割合は70パーセントを超えると指摘した。

この時期の漢語の由来は漢籍や漢訳仏典から伝えられた従来の漢語がある一方、文明開化に伴う新しい西洋知識や概念などを表す漢語もある。田中が指摘した基本漢語の50語はさらに「口語的な語」「科学技術や社会制度を表す語」「抽象概念を表す語」の3種類に大別された。「発展」という漢語は「抽象概念を表す語」の類に属する。

畢亜莉（2021）によれば、新漢語「発展」は日本人による造語であり、当時の中国人留学生によって漢語辞書や刊行物を通し中国へ流入したことを明らかにした。しかし、新漢語「発展」が最初に使われた段階では、どのような使用状況であったか。この時期に、どのように基本語になっていたのかに関する研究は、筆者が調査した限りでは、見つけることはできなかった。また、「発展」とその類義語「開発」を、使う初期にどのように使い分けるのかについては、本稿では、『太陽コーパス』を中心として、明らかにしたい。

2 「発展」について

2.1 登場と定着

2.1.1 辞書記述

新漢語「発展」に関する辞書の記述には、以下のようなものがある。

はってん【発展】（名）

(1) 物事が進み、ひろがっていくこと。より低い状態から、より高く、より完全に、より文化し、より豊かに、より複雑になっていくこと。勢いや力などが伸びてひろがること。盛んになること。

* 一年有半（1901）〈中江兆民〉附録・獵官は権利なり「然らば即ち我邦憲政の発展は、所謂上之れを援き下之れを推したるの効にして」

* 春潮（1903）〈田山花袋〉六「盛んな恋情の発展」

* 吾輩は猫である（1905-06）〈夏目漱石〉一一「個性の発展といふのは個性の自由と云ふ意味だらう」

* 新西洋事情（1975）〈深田祐介〉「民主主義」夫人、南アにゆく「日本大使館の高官がSAAの後部座席に乗せられてしまって、抗議問題にまで発展したことがあるし」

(2) 略¹。

『日本国語大辞典 第二版』2001

『日本国語大辞典 第二版』(2001)における「發展」は「名詞」として取り上げられ、その初出例は『一年有半』(1901)であり、『春潮』(1903),『吾輩は猫である』(1905-06),『新西洋事情』(1975)の例も取り上げられている。この4つの例文は、20世紀初期の例であり、名詞として使われ、『新西洋事情』の例の中では、「發展した」のように「サ変動詞」の形で使われている。畢亜莉(2021)によれば、「發展」の初出は、1872年中村正直による『自由之理』であり、「才性を發展させる」²のように使われている。また、「發展」は日本人自らが作り上げた新漢語だと明らかにした。「發展」が使われた初期に、「心智を發展する」「社会を發展する」のような形で使われていることがわかった。

2.1.2 雑誌コーパスにおける「發展」の使用頻度推移

前節では、「發展」が明治初期に造出された新漢語であると指摘した。ゆえに、本節は筆者が国立国語研究所による雑誌コーパス『明六雑誌』(1874-75),『国民之友』(1887-89),『太陽コーパス』(1895, 1901, 1909, 1917, 1925)³を利用して検索した。その結果、「發展」の使用状況は表1に示すとおりである。

表1 雑誌コーパスにおける「發展」の使用状況

雑誌 品詞	明六雑誌	国民之友	太陽					合計
	1874-75	1887-88	1895	1901	1909	1917	1925	
名詞	0	0	5	25	212	180	92	514
サ変動詞	0	0	2	7	99	76	44	228
その他	0	0	2	1	82	79	41	205
合計	0	0	9	33	393	335	177	947

¹ 『日本国語大辞典 第二版』(2001)に、「發展」②の意味「異性関係や酒などに耽って遊び歩くこと」の初出例は1919年『現代新語辞典』からである。本稿の調査例にはいずれもこの意味の例が見つからなかった。今回の考察から除外する。

² 原文は漢文体である。

³ 『明六雑誌』は、1874年から1875年にかけて、1号から43号まで発行され、西洋の近代思想を普及するために書かれた広範な論説155編が収められているものである。『国民之友』は、1887年から1888年にかけて、1号から36号まで、延べ語数101万語、発行部数は当時発行された雑誌の中では第1位であり、全国の知識層に広く普及し、当時の社会に大きな影響を与えた雑誌であった。田中牧郎(2005)では、『太陽コーパス』は1901年を起点に8年刻みで、1909年、1917年、1925年のデータを取り、さらに創刊年にさかのぼり1895年のデータもとった。各年12号を対象に、計60冊のデータを集めたと述べている。この5年間のデータでは、言葉の平均使用率は反映できないが、その使用傾向はある程度反映することができる。

表1から次のことを読み取ることができる。『明六雑誌』(1874-75)や『国民之友』(1887-88)に、「発展」の使用例が見当たらなかった。『太陽コーパス』の中では、「発展」の使用例が確認できるようになった。「発展」の雑誌コーパスにおける初出は1895年である。この初出例は、『日本国語大辞典 第二版』(2001)の初出例より6年早く、畢亜莉(2021)で指摘した初出例より23年間遅れている。筆者の調査では、「発展」は中村正直『自由之理』に使われ始めてから、『愛国志林』『愛国新誌』のような自由民権運動の機関紙にも使われるようになった。『自由之理』は自由民権運動に大きな影響を与え、『愛国志林』(1880)『愛国新誌』(1880-1881)における「発展」の早期使用は、『自由之理』と大きく関わっていると考えられる。しかし、1890年以前に、「発展」は一般的に広く使われていなかった。

『太陽コーパス』において、1895年の「発展」の使用例は9例であったが、1901年になると、33例に増加し、1909年になると、使用例は393例となり、最多となった。1917年の使用例は1909年の使用例より減少したが、高い使用率を維持している。つまり、「発展」が19世紀末期に登場してから短期間に多用されるようになり、20世紀初期になって日本語の語彙として定着したと言えるだろう。

また、全体から見ると、名詞としての用法が最も多く、全用例の半分以上を占めている。名詞とサ変動詞の用法傾向と同じく、1895年から1909年の間に、大幅に増加し、1909年から1925年に減少している傾向が著しい。

2.2 用例に見る意味・用法の変化

本節では、『太陽コーパス』における「発展」の使用状況を調査した。『太陽コーパス』における「発展」の使用例は947例であった。その品詞別・年次別の使用頻度は表2に示す。

表2 『太陽コーパス』における「発展」の品詞別・年次別頻度

年 \ 品詞	名詞	他動詞	自動詞	合成語	判別できない ⁴	計
1895	5 (55.6%)	1 (11.1%)	1 (11.1%)	2 (22.2%)	0 (0%)	9 (100%)
1901	25 (75.8%)	2 (6.1%)	5 (15.2%)	1 (3.0%)	0 (0%)	33 (100%)
1909	212(53.9%)	18 (4.6%)	71 (18.1%)	79 (20.1%)	13 (0.8%)	393 (100%)
1917	180(53.7%)	8 (2.4%)	56 (16.7%)	76 (22.7%)	15 (4.5%)	335 (100%)
1925	92 (52.0%)	4 (2.3%)	30 (17.0%)	40 (22.6%)	11 (6.2%)	177 (100%)
合計	513(54.2%)	33 (3.5%)	163(17.2%)	198(20.9%)	39 (4.1%)	947 (100%)

⁴ 自動詞用法か他動詞用法か判別が難しい例として、「国運を發展せしむるの要素。(「政治、外交憲法満二十年」/1909 浅田江村)」のような〈発展+受け身の助動詞〉の表現である。これらの表現は30例がある。また、「開発せしむ」(2例)や「開発せらるる」(1)もあった。また、「人心發展」「一国發展」のように、名詞か合成語か判別しづらい例もある。これらの例は「判別できない例」として扱う。

表2によると、「發展」は『太陽コーパス』において、「名詞」「他動詞」「自動詞」「合成語」のように四種類の形で使用されていたことがわかった。次の例(1)は「他動詞」、例(2)は「自動詞」である。これらの例において波線は他動詞の対象となる語句と自動詞の主体となる語句それぞれに表す。(下線は筆者による。以下も同様。)

- (1) 故に、此に在ては、多年の鬱積を發展するにありてと雖ども、彼に在ては初めて源頭に水の流を作らんとするに左も似たり。「朝鮮国教育大方針の議」『太陽』1895-4 巖本善治
- (2) 主客兩觀の詩及び自由の詩としては、外界の因果と共に内面的活動が外部の動作となりて發展するまでの情状を明にせざるべからず
「劇曲的人物と近松巢林子」『太陽』1895-4 高山樗牛

『太陽コーパス』に見られる「發展」の947例の意味・用法は『日本国語大辞典 第二版』(2001)、現代国語辞書『岩波漢語辞典』(1987)『三省堂国語辞典 第四版』(1993)『新選国語辞典 第八版』(2007)とほぼ同じであるが、その用例を詳しく確認したところ、時代的变化を見ることができる。

『日本国語大辞典 第二版』(2001)の意味は現代国語辞書の意味と対照し、「發展」の意味は「1 物事、勢いや力が進み、伸び広がること。」「2 より一層栄えていくこと。」に大別されることができる。「発」は「すすむ、のびる、あばく、ひらく」の意味がある一方、「展」は「ひろがる、ひろめる、ひろげのばす」の意味がある。両方とも空間的や時間的な延長がある。つまり、「發展」の意味は「発」と「展」のそれぞれの意味を結合して成り立つと言えるだろう。

1895年と1901年に、「發展」の主体となる語句は例(3)のように「宗派は必然の理由より開發せるもの」や「武士道の精神」「宗教」など、「精神」に関わる意味合いの例が多い。ところが、1909年の用例では、「發展」の主体となる語句は例(4)のように「米国の実業」「獨逸」「大和民族」など、「人類の社会的な活動」「具体的な存在物」に関わる意味合いの例が多くなっている。これは、「發展」が使われていた時代と関わると考えられる。

- (3) 即ち其指導者は伝教大師最澄其人なりとす、と、博士の此主張に対しては、余輩吉田氏の意見に同意せざるを得ず、即ち各宗派は必然の理由より開發せるものにして普遍性の契合點あると共に益々特殊性に向ふて發展すべき差別點あるべきなり
「宗教時評」『太陽』1901-13 荻野仲三郎
- (4) 一転して、何故に実業が發達するやを考ふるに、彼の米国の実業は日に月に進歩發展して止まざるものは、実業学校あるが為めである。
「名士の獨逸觀代議士長島鷺太郎君談」『太陽』1909-1 長島鷺太郎

2.3 他動詞から自他動詞への変化について

『日本国語大辞典 第二版』(2001)における「発展」の品詞記述は「名詞」であり、現代国語辞典⁵における「発展」の品詞記述は「名詞」と「自サ」の両方を区別して記載する。辞書においての品詞の記述の変化を見ることができる。

「発展」は前述したように、最初の段階は「心智を發展する」「社会を發展する」のような形で使われていたことで、他動詞の用法で使用されていたと言える。

一方、『太陽コーパス』における「発展」の品詞の時代的な変化も見ることができる。表2で、「発展」の品詞別、年次別頻度を確認したところ、他動詞的な用法が減少する傾向と、自動詞的な用法が増加する傾向が示され、不安定な用法が見られる。他動詞用法の減少は、自動詞用法の増加に影響を与えたと考えられる。

また、1909年から、対象となる語句と主体となる語句が同一の場合、「発展」は自動詞と他動詞両方の用法がある。次の例(5a/5b)、(6a/6b)、(7a/7b)の通りである。

(5a) 宗教の力は場合に依つては非常なる結合力顯はす、土耳其如きも其の盛なるに方つては、回教の力を利用して大に其の国力を發展したのであつた

「名士の土耳其觀土耳其の事情」『太陽』1909-10 飯島亀太郎

(5b) 3万事が此の筆法であるから、何時になつても其の国民を統一し、ナシヨナライズするといふことは出来ぬ、国力が發展し、旺盛な時代に於てこそ、この筆法も敢て差支は無かるうが

「名士の土耳其觀土耳其の事情」『太陽』1909-10 飯島亀太郎

(6a) 獨逸及合衆国は関税の翼に隠れて、益々、自国の工業及航海業を發展せしめたり。英国は獨逸に取りて唯一無二の得意先となれり

「英獨の競争」『太陽』1909-12 佐藤辰郎

(6b) 農業経済のみに甘んず可らず。是と共に英国と同じく、工業及航海業に發展せざる可らず。此事殊に合衆国及び獨逸の国是とすべき所なりとするにあり。

「英獨の競争」『太陽』1909-12 佐藤辰郎

(7a) ともかく欧羅巴諸国に対して資本国たる地位を得たと云ふことは慥かであるから戦争後に於て支那に対して経済力を發展して資本国と成り得る国は亜米利加であると云はなければならぬ。

「支那の統一と安定」『太陽』1917-8 内藤湖南

(7b) 此は啻に戦争の影響に関する問題なるのみならず、将来に於ける支那の経済力の發展するや否やの問題も此の中に蘊蓄せられて居るのである。

「支那の経済力」『太陽』1917-12 内藤湖南

⁵ 現代国語辞書は『三省堂国語辞典 第四版』(1993)と『新選国語辞典 第八版』(2007)を指す。

例文 (5a/5b) を示すように、同一の作品に、「国力」は「發展する」の対象となる語句（他動詞の場合）になる一方、「發展する」の主体となる語句（自動詞の場合）にもなる。例文 (6a/6b) は (5a/5b) と同じく、「工業及航海業」は「發展する」の対象となる語句（他動詞の場合）と主体となる語句（自動詞の場合）両方になる。例文 (7a/7b) においては、同一作者であるが、7a と 7b が掲載された巻は異なる。しかし、「支那の経済力」は「發展する」の対象となる語句と主体となる語句の両方になる。これは作者の好みと関わるのではないかと考えられる。さらに、考察する必要がある。

2.4 他動詞の対象，自動詞の主体について

次に、先に挙げた例 (1) (2) のように、「發展」の対象となる語句や主体となる語句を、国立国語研究所による『分類語彙表』増補改定版 (2004) と対照し、それぞれの意味タイプに分類してみた。表 3 は「發展」の他動詞の対象となる語句の分類であり、表 4 は自動詞の主体となる語句の分類である。

表 3 「發展」の他動詞の対象となる語句の分類

分類		年	1895	1901	1909	1917	1925
抽象的關係	様相		0	0	3	1	1
	力		0	1	3	3	0
	時間		0	0	3	1	0
	その他		0	0	0	2	0
	合計		0	1	9	7	1
人間活動 —精神および行為	心		0	0	1	0	1
	行為		1	0	1	0	0
	事業		0	0	3	0	0
	その他		0	0	1	1	0
	合計		1	0	6	1	1
人間活動の主体			0	0	3	0	2
自然物・自然現象			0	1	0	0	0
総計			1	2	18	8	4

表 3 によると、他動詞の対象となる語句は大項目「抽象的關係」と「人間活動—精神および行為」の分野に集中する。その中で、「人間活動—精神および行為」の分野は最も多く、「抽象的關係」の分野はその次に多いことがわかった。また、「人間活動の主体」「自然物・自然現象」の分野にも数例が確認できた。小項目では、「力」の分野に一番多いことがわかった。「力」の分野に含まれる語句は「勢力」(3)、「国力」(2)、「筆力」(1)⁶となっている。

表4 「発展」の自動詞の主体となる語句の分類

分類		年				
		1895	1901	1909	1917	1925
抽象的關係	様相	0	0	5	2	1
	力	0	0	5	4	1
	空間	0	0	1	2	2
	その他	0	0	4	2	5
	合計	0	0	15	10	9
人間活動の主体	人間	0	0	2	1	0
	人物	0	1	10	4	2
	公私	0	0	13	12	5
	社会	0	1	3	1	0
	その他	0	2	2	1	3
	合計	0	2	30	19	10
人間活動 —精神および行為	心	0	2	9	2	1
	生活	0	1	1	1	0
	行為	1	0	0	0	0
	経済	0	0	3	5	1
	事業	0	0	6	11	4
	その他	0	0	6	5	4
	合計	1	3	25	24	10
生産物・用具		0	0	0	1	0
自然物・自然現象		0	0	1	2	1
総計		1	5	71	56	30

一方、表4では、自動詞の主体となる語句は「人間活動—精神および行為」「人間活動の主体」「抽象關係」の3つの分野に集中する。「人間活動—精神および行為」の分野が一番多く、「人間活動主体」の分野は、二番目に多く、次に「抽象的關係」の順である。また、「自然物・自然現象」「生産物・用具」の分野にも、例が少なからずある。小項目では「公私」「事業」「人物」「心」「経済」の分野に集中することがわかった。「公私」の分野に含まれる語句は「日本」(6)、「獨逸」(4)、「支那」(3)、「南米」(2)、「日本殖民教会」(1)、「加州のその他」(1)、「留多加」(1)、「亜米利加」(1)、「米国諸国」(1)、「東洋諸国」(1)、「列国」(1)、「露西亞」(1)、「滿蒙」(1)、「稚内」(1)、「英米」(1)がある。一方、「事業」の分野に含まれる語句は「商工業」(2)、「事業」(2)、「工業」(2)、「米国の実業」(1)、「工業及航海業」(1)、「獨逸化学工業界」(1)、「飛行事業」(1)、「電気の化学」(1)、「化学工業」(1)、「造船業」(1)、「法医学」(1)、「事業」(1)、「実業」(1)、「産業」(1)、「軍備」(1)、「農業」(1)、「業務」(1)、「事」(1)がある。「経済」

⁶ 括弧内の数字は出現の回数を表す。以下も同様。

の分野に含まれる語句は「経済」(2),「貿易」(2),「日本海外貿易」(1),「日本の対支貿易」(1),「輸出貿易」(1),「供給」(1)がある。

他動詞の対象となる語句の意味分類と自動詞の主体となる語句の意味分類から、「發展」は明治後期から大正初期の時代的变化を見ることができる。「發展」の他動詞的な用法は「力」「時間」などの「抽象的關係」に集中するに対して、自動詞的な用法は「公私」「事業」「人物」などのような「人間活動—精神および行為」「人間活動主体」に集中する。1909年と1917年に、「發展」の使用例が急増したが、それは自動詞となる語句の「公私」「事業」「人物」「心」の4つの分野での使用例が増加したと大きくかかわっていると考えられる。この時期に、明治政府は殖産興業の政策を取った。経済の方面では、官営の軍事工場の経営や工学知識の習得などによって、「軽工業」「重工業」「造船技術」などに大きな成果を得た。一方、政治軍事の方面では「日清戦争」(1895)「日露戦争」(1904-1905)「第一次世界戦争」(1914-1918)を経て、日本の工業化が進んだ。産業革命に伴って、植民地の工業原料の輸出と製品の輸入に関する貿易も欠かせないものであった。

次節では、同時期に「發展」の類義語「開發」の使用状況について調査してみる。

3 類義語群の年次別使用頻度

『自由之理』では、「才智,智思,智見,才能,智慧,才性,心思,心智,品行」の述語として、「發生スル,進メ,顕露シ,發シテ,發出シ,開展スル,舒展セザ,顕ハス,發顕セ,生長スル,開發」も使われていた(畢亜莉 2021)。その述語は『太陽コーパス』で検索したところ、結果は表5に示す。

表5 「雑誌コーパス」における「發展」およびその類義語使用頻度

語彙	雑誌	明六雑誌 1874-75	国民之友 1887-88	太陽					合計
				1895	1901	1909	1917	1925	
發展		0	0	9	33	393	335	177	947
發生		4	10	98	138	107	88	139	584
發出		1	5	0	2	0	0	0	8
開展		0	0	1	4	15	10	8	38
舒展		1	0	0	0	0	0	0	1
發顕		0	0	0	0	0	0	0	0
生長		6	41	50	35	22	19	18	191
顕露		0	0	0	0	0	0	0	0
開發		2	19	33	70	45	47	19	235
進め(ミ)		0	1	10	5	1	2	3	22
顕(あらわす)		0	0	0	0	0	0	0	0
合計		14	76	201	287	583	501	364	2,026

表5には、「発顕」、「顕露」、「顕す」を含む例文は見当たらなかった。「発出」「開展」「舒展」「進め(ミ)」を含む例文が確認されたが、例数が少ない。「発生」「生長」「開発」を含む例文が多い。また、「発生」「生長」は『日本国語大辞典 第二版』(2001)では、「発生：①はえ出ること。うまれ出ること。また、物事の起こること。生じること。②生物学でいう語」「生長：①人、また動物が生まれそだつこと。おいたつこと。しょうちょう。②草木などのおいそだつこと。しょうちょう。③大きくなること。生まれひろがること。しょうちょう」との記載がある。

「発生」について、前田晶子(2007:284)では、幕末の蘭医学、小児科領域において西洋の発達概念が導入された際、蘭語 *ontwikkeling* の訳語として当たった。子供の身体変化のメカニズムを指す。その後、生物学や生理学において定着を見るが、子供研究を含めた他の領域では用いられることなく、代わってある段階から「発達」が訳語として選択される。同時に、この語の適応範囲は人間の精神的・認知的な側面における変化や、社会や国家の発展の過程を示すものとして用いられるようになると述べている。

一方、「生長」は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)において、よく「植物」「動物」にかかわる言葉と一緒に使用されている。

自由民権運動の機関紙としての『愛国志林』(1880)『愛国新誌』(1880-1881)では、「人智開発ノ事」「人智ノ開発セン」「人智ヲ開発シ」「民智ノ開発セシ」「民智ヲ開発スル」のような記述も確認された。これらの例における「開発」と中村正直『自由之理』における「才性を発展させる」の「発展」は区別せず、使用されていたと言えるだろう。また、20世紀初期の英和英辞書⁷に、「発展」「開発」の両方が「Development」の訳語として記載されている。

一方、国立国語研究所が開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用いて、「語彙素」に「発展」「開発」で検索したところ、「発展」の10,149例に対し、「開発」は24,083例であった。つまり、現代日本語において、「発展」より「開発」のほうがよく使用されることがわかった。中国語では、北京大学中国言語学研究中心が開発した『CCL語料庫』(Center for Chinese Linguistics PKU)を用いて検索したところ、「発展」の518,710例に対し、「開発」は125,756例であった。また、雑誌名においては、日本では、『国際開発研究』(Journal of International Development Studies)『国際開発学会』(The Japan Society For International Development)のように「開発」はよく使われた。中国では、「中国産業海外発展協会」(China Overseas Development Association)「中国亞洲經濟發展協会」(China-Asia Economic Development Association)のように「発展」がしばしば用いられている。

「発展」と「開発」は最初の段階でどのように使い分けるだろうか。次節では「発展」の意味合いに近い「開発」を対象に、その異同を検討する。

⁷ 上野陽一ほか『学生英和辞典』(1910)、齋藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』(1918)、井上十吉『井上英和大辞典』(1919)を参照した。

4 「開發」について

4.1 使用と定着

4.1.1 辞書記述

『日本国語大辞典 第二版』（2001）では、「森林や荒地などを切り開いて田畑にすること」と「開き始まること」という意味での初出は1548年の例と1802年の例が取り上げられているが、「知識などを開き導くこと」「産業を興して、天然資源を生活に役立つようにすること」と「新しいものを考え出し、実用化すること」という意味で取り上げられている例は明治期が多い。『明治のことば辞典』（1986）『近現代辞源』（2010）では、「開發」は明治のことばや近代のことばとして取り上げられていた。

また、表5のように、『明六雑誌』（1874-75）では、「開發」は2例が見つかり、低頻度で使われていた。しかし、『国民之友』（1887-88）になると、その使用が急増し、19例に至った。『太陽コーパス』では、1901年の使用例が最も多く、1909年から1925年まで用例増減は不安定であることがわかった。

4.1.2 雑誌コーパスにおける「開發」の使用頻度推移

「開發」の使用状況の調査について、「發展」と同じ方法をとる。まず、雑誌コーパスにおける「開發」の品詞別・年次別の使用頻度を表6に示す。

表6 雑誌コーパスにおける「開發」の品詞別・年次別頻度

品詞	年	名詞	他動詞	自動詞	合成語	判別できない ⁸	合計 ⁹
	明六 1874-75		2 (100.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
国民之友 1887-88		6 (31.58)	6 (31.58)	1 (5.26)	3 (15.79)	3 (15.79)	19 (100.00)
太陽	1895	11 (33.33)	8 (24.24)	5 (15.15)	2 (6.06)	7 (21.21)	33 (99.99)
	1901	33 (47.14)	20 (28.57)	6 (8.57)	6 (8.57)	5 (7.14)	70 (99.99)
	1909	19 (42.22)	10 (22.22)	9 (20.00)	3 (6.67)	4 (8.89)	45 (100.00)
	1917	22 (46.81)	15 (31.91)	2 (4.26)	3 (6.38)	5 (10.64)	47 (100.00)
陽	1925	13 (68.42)	3 (15.79)	0 (0.00)	2 (10.53)	1 (5.26)	19 (100.00)
合計		106 (45.11)	62 (26.38)	23 (9.79)	19 (8.09)	25 (10.64)	235 (100.01)

⁸ 自動詞用法か他動詞用法かの判別が難しい例として、「此智識さへ開發進歩せば（「情感の世界」/1888 鷹陵外史）」のような〈四字漢語サ変動詞〉の表現。これらの表現は10例、異なる例文は7例である。「機能の未だ開發せられざるもの（「婦人の生涯」/1895 作者不詳）」のような〈開發+受け身の助動詞〉の表現。これらの表現は11例がある。また、「開發せしむ」（2例）や「開發せらるる」（1）もあった。これらの例は「判別できない」として扱う。

⁹ 割合は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100とはならない。

表 6 によると、「開発」の名詞的な用法が一番多く、4 割以上を占めていることがわかった。「他動詞」と「自動詞」の用法はその次に多い。また、『国民之友』（1887-88）の 19 例の中に、「開発」の動詞用例は 7 例であり、そのほとんどは、次の例 (7) (8) のように、「思想や知識を開発する」のような文脈に用いられている。つまり、「開発」は最初の段階に、「発展」と区別せずに使用されていたと実証できる。

- (7) 是に於て世の頑陋の徒は學術の精覈せざは人類を利するに足らずとなし智識を開発するは社会を益すること能はずと為し

「第十九世紀の文明を論ず」『国民之友』1887 酒井雄三郎

- (8) 我日本にして一種特別の新思想を開発するを得、必ずや其争鬪其調和の間に於て

「批評論」『国民之友』1888 西堂居士

『太陽コーパス』では、「開発」の使用頻度の増加が見られる。1895 年と 1901 年では、「思想や智識」の開発に限らず、次の例 (9) (10) (11) 「自然資源」（「利源」「支那」「国」など）や「社会的活動」（「貿易」など）に関わるものの例も見られるようになった。1917 年には、例 (12) のように「富源や地域を開発する」の使用例が最も多い。

- (9) これを要するに今回の新組織は同半島の利源を開発し、政治を行ふに於て大に便益を興ふる

「海外彙報」『太陽』1895 作者不詳

- (10) 前年荒尾精氏も支那を開発する一手段として漢法医を支那内地に出すべきことを出張せしことあり

「海内彙報」『太陽』1895 作者不詳

- (11) 支那の版図広漠なりと雖も内地の外国貿易を開発せざる地方甚だ多し

「印度」『太陽』1895 呉大五郎

- (12) 露国の経営と、我経営とは、此の如くにして、相待つて該地域を開発するを得ん。

「政治時評」『太陽』1901 国府犀東

4.2 他動詞の対象、自動詞の主体について

「開発」の使用状況を明らかにするため、本節では、「開発」は『太陽コーパス』における他動詞の対象となる語句、自動詞の主体となる語句を国立国語研究所による『分類語彙表 増補改訂版』と対照し、「開発」の対象となる語句と主体となる語句の意味タイプによって分類を行う。表 7 は対象となる語句の分類であり、表 8 は主体となる語句の分類である。

表 7 から、次のことを読み取ることができる。「開発」の他動詞の対象となる語句は、大項目では「生産物および用具」の分野が最も多く、「人間活動—精神および行為」「人間活動の主体」の分野がその次に多く、「抽象的關係」や「自然物および自然現象」の分野にも数例確認できる。

表7 「開發」の他動詞の対象となる語句分類

分類		年				
		1895	1901	1909	1917	1925
抽象的關係	類	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (33.33)
	様相	1 (12.50)	0 (0.00)	1 (10.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	空間	0 (0.00)	2 (10.00)	1 (10.00)	2 (13.33)	0 (0.00)
	合計	1 (12.50)	2 (10.00)	2 (20.00)	2 (13.33)	1 (33.33)
人間活動の主体	人物	0 (0.00)	1 (5.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	公私	4 (50.00)	4 (20.00)	2 (20.00)	2 (13.33)	0 (0.00)
	合計	4 (50.00)	5 (25.00)	2 (20.00)	2 (13.33)	0 (0.00)
人間活動 —精神および行為	心	1 (12.50)	2 (10.00)	1 (10.00)	3 (20.00)	0 (0.00)
	生活	0 (0.00)	1 (5.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	經濟	0 (0.00)	1 (5.00)	2 (20.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	事業	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (6.67)	0 (0.00)
	合計	1 (12.50)	4 (20.00)	3 (30.00)	4 (26.67)	0 (0.00)
生産物および用具	部品	2 (25.00)	8 (40.00)	1 (10.00)	6 (40.00)	1 (33.33)
	資材	0 (0.00)	1 (5.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	土地利用	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (6.67)	0 (0.00)
	合計	2 (25.00)	9 (45.00)	1 (10.00)	7 (46.67)	1 (33.33)
自然物および自然現象		0 (0.00)	0 (0.00)	2 (20.00)	0 (0.00)	1 (33.33)
合計		8 (100.00)	20 (100.00)	10 (100.00)	15 (100.00)	3 (99.99)

表8 「開發」の自動詞の主体となる語句分類

分類		年				
		1895	1901	1909	1917	1925
抽象的關係	作用	1 (20.00)	0 (00.00)	0 (00.00)	0 (00.00)	0 (00.00)
	空間	0 (00.00)	1 (16.67)	0 (00.00)	0 (00.00)	0 (00.00)
	類	0 (00.00)	0 (00.00)	1 (11.11)	0 (00.00)	0 (00.00)
	合計	1 (20.00)	1 (16.67)	1 (11.11)	0 (00.00)	0 (00.00)
人間活動の主体	公私	0 (00.00)	1 (16.67)	2 (22.22)	0 (00.00)	0 (00.00)
	機関	0 (00.00)	1 (16.67)	0 (00.00)	0 (00.00)	0 (00.00)
	合計	0 (0.00)	2 (33.33)	2 (22.22)	0 (00.00)	0 (00.00)
人間活動 —精神および行為	生活	2 (40.00)	0 (00.00)	0 (00.00)	0 (00.00)	0 (00.00)
	心	1 (20.00)	2 (33.33)	0 (00.00)	0 (00.00)	0 (00.00)
	經濟	1 (20.00)	0 (00.00)	0 (00.00)	0 (00.00)	0 (00.00)
	行為	0 (00.00)	0 (00.00)	1 (11.11)	0 (00.00)	0 (00.00)
	合計	4 (80.00)	2 (33.33)	1 (11.11)	0 (00.00)	0 (00.00)
生産物および用具		0 (00.00)	1 (16.67)	0 (0.00)	2 (100.00)	0 (00.00)
自然物および自然現象		0 (00.00)	0 (00.00)	5 (55.56)	0 (00.00)	0 (00.00)
合計		5 (100.00)	6 (100.00)	9 (100.00)	2 (100.00)	0 (00.00)

また、小項目では、「部品」の分野では18例が確認され、圧倒的に多い。一方、「公私」の分野に12例が確認された。「部品」の分野に含まれる語句は「富源」¹⁰(13)「利源」(5)であり、「公私」の分野に含まれる語句は「支那」(4)「盲清」(1)「清国」(1)「台湾」(1)「朝鮮北清」(1)「阿弗利加」(1)「印度支那」(1)「満州」(1)「国」(1)である。「公私」での分野に対象となる語句の行為主体は「日本」、「我々国民」、「荒尾精」、「英国」であり、いずれも政府が主導したものである。次に示した例(13)では、点線は行為主体を表し、波線は対象となる語句をあらわす。

- (13) 此点よりしても充分日本は支那を膺懲し、之を開発し嚮導して以て進むの権利義務あるものとす
「日本と欧米」『太陽』1895-5 飯田旗軒

表6に示したように、「開発」の自動詞用法は比較的少ない。続いて、自動詞の主体となる語句の意味タイプの分類を表8に示す。

表8では、「開発」の自動詞の主体となる語句は「人間活動—精神および行為」「人間活動の主体」の分野に集中する。「自然物および自然現象」「抽象的關係」「生産物および用具」の分野に少数の例があった。小項目では、「自然物および自然現象」の「天地」の分野に使用例が多いことがわかった。「天地」の分野に現れた主体となる語句の5例は全て「宇宙」である。その5例は次に示す。

- (14a) 本篇は、以上の小冊子と、其書とを打交ぜて、粗ボク、大体の筋途を、吾が『太陽』の読者に紹介しやうとするのである。『人生五十』という十五、六を加へた様な短い期間では、斯の宇宙が、ドウ開発しつつあつても、又ドウ闔塞しつつあつても、更に痛痒を感じ無い。
「宇宙の闔塞」『太陽』1909-5 鶴田賢次 P161
- (14b) 右の如くにしてと許りは謂へまいが、兎に角爾ういふ様な変異が起り、それからして宇宙は開発し来つたか、来るのであらうと思はるる。斯の如くして開発した宇宙は、其後如何に成り行くであらう乎
「宇宙開発論」『太陽』1909-6p168
- (14c) それで宇宙が開発したものと見做した所で、それから序を逐つて恒星の一代を叙した。
「宇宙開発論」『太陽』1909-6 鶴田賢次 P170
- (14d) 宇宙が其處で一先開発した時である。
「宇宙開発論」『太陽』1909-6 鶴田賢次 P174

¹⁰ 佐藤佐(2011)では、「富源」は明治中期以後に作られた言葉と推測される。「富源」に関する出版物は満州や北海道といった当時の「未開拓の地」における鉱山や森林、漁業資源を扱っているものが多い、と述べている。

以上の5例の出典はいずれも『宇宙開闢論』である。『宇宙開闢論』は理学博士鶴田賢次が1906年に、スウェーデン物理化学家であるアレニウスの『宇宙の立行き』『宇宙物理学』をまとめたものである。鶴田賢次は「宇宙開闢論」と題して、その内容を3つの部分「宇宙の闢塞」「宇宙の開発」「無窮な宇宙—附、宇宙に於ける生霊」に分けて、『太陽』に掲載した。「宇宙開闢論」では、「開発」が6回使用され、その中で「名詞」として「宇宙の開発」「宇宙開発」のような形で2回使用された。一方、「自動詞」としては「宇宙は開発し〜」「開発した宇宙」「宇宙が開発し〜」「宇宙が〜開発し」のような形で4回使用された。

一方、一戸直蔵と小川清彦が1912年に翻訳したアレニウス著『宇宙開闢史』(Dis Vorstellung vom weltgebaude imwandel der zeiten)及び、一戸直蔵が1914年に翻訳したアレニウス著『宇宙発展論』(Das Werden der welren)で、目次を確認したところ、

「惑星の開展 ライブニッツの地球発展論 スエデンボルグの開闢論」

(「第六章 近代の曙光—生住世界の増加」『宇宙開闢史』1912)

「星雲開展の途行に関する推論」「週期的宇宙進化」

(「第七章 星雲状態と太陽状態」『宇宙発展論』1914)

「開展」「発展」「開闢」「進化」のような語が使用され、「開発」のような表現が見当たらなかった。特に、一戸直蔵が1914年に訳した書は『宇宙発展論』と題した。一戸直蔵が『宇宙開闢史』の「訳者序」に、「此著書の第一版の出版せられし頃鶴田理学博士は『理学界』に於いて其大要を紹介せることありき、当時余は心中之邦語に移して我国有識の人士の繙読に便するの必要を感じしも、之れに要する時を得る能はざりき、既にしてアレニウスが更に宇宙開闢論史(Dis Vorstellung vom weltgebaude imwandel der zeiten)を出版せらるるに及んで一層其希望を高めた」との記述がある。一戸直蔵は鶴田賢治の文章を読んだことがあると推測できるだろう。しかし、その訳書において、「開発」が見当たらなかった理由について、さらに調査する必要がある。

「開発」の自動詞用法が少ないことについて、その理由は次のように考えられる。「開発」は「開化」「開墾」「開拓」と同じく、人から精神や自然資源への働きかけが必要である。つまり、人類の活動は精神へ教え導くや自然資源への拡大作業をすることである。

また、「開発」の使用例は1901年に最も多く、70例に至った。その後、1909年から使用例が減少していた。それは、殖産興業政策の推進により、自然資源の開発の代わりに、各産業(軽工業、重工業)の発展と大きく関わると考えられるだろう。

5 「発展」と「開発」の比較

「発展」と「開発」は両方とも小項目「公私」の分野で多く使用することがわかったが、使用方法は異なる。「公私」の分野において、「発展」は自動詞の用法で使用される一方、「開発」は他動詞の用法で使用される。

「開発」の対象となる語句は「支那」（「清国」「満州」）、「台湾」,「朝鮮」,「阿弗利加」,「印度」のような開発途上国であるのに対し、「発展」の主体となる語句は「日本」「獨逸」「加州」「亜米利加」「露西亞」「英米」のような先進国である。しかし、「開発」の対象となる語句の行為主体は「日本」,「我々国民」,「荒尾精」,「英国」であり、これと「発展」の主体となる語句（「大和民族」,「獨逸人」,「獨逸国民」,「獨逸民族」,「ゼルマン人」,「日本人」）と同じ性質である。それは、その国を開発するという意味ではなく、その国の自然資源を開発するという意味で使われていると考えられるだろう。

また、19世紀末期に、「発展」が造語され、「開発」と混乱し使用されていた。しかし、20世紀初期に、「発展」の使用例が多くなった一方、「開発」の使用例が減少していた。「開発」は「富源」「利源」「宇宙」などの自然資源と共起であるのに対して、「発展」は各産業に関わる言葉（「工業」「産業」「事業」「実業」などのような語句）と共起する。「発展」と「開発」は使い分けられるようになった。言語的な要因について、「発展」は「前へすすむ。空間的や時間的にのびる。上達。進歩」のように積極的な意味合いを含んでおり、「開発」は「人から資源への働きかけ」のように中性的な意味である。「発展」は常に「益々」「漸次に」「大に」「非常に」「次第に」のような語彙と共起して、「発展」の意味を強化していると思われる。言語外的な原因について、日本の近代化の一環として、殖産興業の推進により、自然資源の開発の代わりに、20世紀初期に日本の各産業が発展し、ゆえに、「発展」の使用例が増えた一方、「開発」の使用例が減っていった。しかし、近年の状況はそれと逆である。その原因について、さらに考察が必要である。

6 おわりに

「発展」と「開発」は日本近代化の一つの言葉として、以上の考察により、下記のこと明らかになった。

- 一、「発展」は明治初期に登場し、20世紀初期に日本語に定着した。『太陽コーパス』の使用状況により、「発展」の時代的变化が確認できる。「発展」は他動詞の用法から自他動詞両用への変化は、自動詞用法の「公私」「事業」での分野における使用例の増加と大きく関わっている。これらの分野における使用例の増加は明治政府による殖産興業の政策と関わると考えられる。
- 二、新漢語「発展」の基本語化は、類義語「発出、舒展、発顕、顕露」の廃語、「開展、生長、

開発, 進め(ミ)」の減少と関わると考えられる。

三、19世紀末期に、「發展」と「開發」は混同して使用されるようになった。しかし、20世紀初期に、「發展」の使用が増加したのに対し、「開發」の使用が減少する。「發展」と「開發」は使い分けられるようになった。言語的な要因について、「發展」自身は積極的な意味合いを含む一方、常に「益々」「漸次に」「大いに」「非常に」と共起し、積極的な意味合いを強化する。言語外的な原因について、殖産興業の推進により、自然資源の開發の代わりに、各産業が發展していったことが挙げられる。

(ひつ あり・言語文学専攻)

引用・参考文献

論文・著書類

- 汪牧耘 (2020) 『『開發 = ^{カイファ}开发』の意味変容と概念形成——日中における言葉の借用を中心として——』『国際開発研究』29 (1), pp.89-99
- 沖森卓也ほか (2018) 『図解日本の語彙』三省堂
- 加藤剛 (2014) 『『開發』概念の生成をめぐって——初源から植民地主義の時代まで——』『アジア・アフリカ地域研究』13 (2)
- Koponen, Juhani. 2019 “Development: History and Power of the Concept” Forum for Development Studies. Vol. 47 NO.1
- 国立国語研究所 2004 『分類語彙表増補改訂版』大日本図書
- 佐藤仁 (2021) 『『持たざる国』の資源論——持続可能な国土をめぐるもう一つの知』東京大学出版会 pp.35-38
- 田中牧郎 (2005) 「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」国立国語研究所編『雑誌「太陽」による確定期現代語の研究——「太陽コーパス」——』
- 田中牧郎 (2012a) 「新漢語定着の語彙的基盤——『太陽コーパス』の「実現」「表現」「出現」と「あらす」「あらわれる」など——」
- 田中牧郎 (2012b) 「明治後期から大正期の語彙レベルと語種」(田中牧郎ほか 2012) 『近代語コーパス設計のための文献言語研究 成果報告書』
- 田中牧郎 (2014a) 「明治後期における漢語の基本語化」第6回コーパス日本語学ワークショップ予稿集
- 田中牧郎 (2014b) 『『太陽コーパス』による新しい漢語の研究』『日本語学 特集：命令表現』22-4 明治書院
- 陳力衛 (2019) 「近代知の翻訳と伝播——漢語を媒介に——」三省堂
- 永澤済 (2007) 「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』pp.3-4
- 畢亜莉 (2021) 「新漢語『發展』の成立と中国語への受容」北海道大学大学院文学研究科研究論集第30号
- 前田晶子 (2007) 「近代日本の發達概念における身体論の検討」鹿児島大学教育学部研究紀要 pp. 283-259

辞書類

金田一京助ほか（2007）『新選国語辞典 第八版』小学館

見坊豪紀ほか（1993）『三省堂国語辞典 第四版』三省堂

日本国語大辞典第二版編集委員会（2001）『日本国語大辞典 第二版』小学館

山口明穂（1987）『岩波漢語辞典』岩波書店

関連 URL

『日本歴史コーパス CHJ』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search>（最終アクセス日 2021 年 8 月 30 日）

『北京大学中国語学研究中心』 (Center for Chinese Linguistics PKU) http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/（最終アクセス日 2021 年 8 月 30 日）